

それって…感覚のせい？ ～ 子どもの行動のわけ ～

先日、横浜市総合リハビリテーションセンターでの研修に参加しました。

そこで作業療法士の方から聞いた話をご紹介します。

「感覚とは何か？」ということで、作業療法士は“前庭覚・固有受容覚・触覚”の三つに着目しています。

【前庭覚】は、頭の角度（バランス、身体の軸）や回転、加速度を感知する感覚です。

【固有受容覚】は関節（関節の角度）、筋肉の情報を脳に伝える（身体の動き、重み、力加減など）を感じる感覚です。

そしてモンテッソーリ教育にもある五感の一つ【触覚】となります。

感覚は人によって感じ方が違います。

- ① 感じにくいタイプ（例：刺激を求める、多動など）
- ② 感じやすいタイプ（例：刺激を避ける、怖がるなど）
- ③ 定型的な発達をしている子どもの刺激の感じ方

この違いがあることで、その感覚を満たそうと行動に現れるのだそうです。

前庭覚・固有受容覚を、【①感じにくいタイプの人】は、刺激を求めて激しい揺れや回転を好んだり、つま先立ちで歩いたりするそうです。

よく見られる行動として、動きが乱暴に見える、三輪車や自転車に乗っていてスピードを出しすぎる、力加減が苦手、などあります。

触覚を、【②感じやすいタイプの人】は、刺激を嫌がるので服の繊維がチクチクすることや足場が不安定な所、大きな音や騒がしい場所などが苦手です。

よく見られる行動として、汚れることを嫌う、砂場に入りたがらない、直接絵の具に触れることが苦手、などがあります。

皆さんは、お子さんのこのような様子を見たことはありませんか？

作業療法士の方は、その様子を見た時に“もしかしたら感覚の過敏さがあるのかもしれない…”と、考えるのだそうです。

この学びを基に、私達がすべきことは、気付くこと、理解して対応していくことです。

当事者の敏感な感じ方により、不快な思いを回避または満たすために準備すると良いものがあります。例えば耳栓を用意したり、話し声の調整や音の出ない工夫、感覚を満たす環境と遊びなどの活動を取り入れることです。

特に遊びでは、達成感・挑戦・集中・人とのコミュニケーション・感情の調整・理解力・動作や操作が学べるとありました。

子どもにとって、自分の体を使った実体験や自発的に取り組むことが、意味のある活動となり、多くを学べるようになります。

この話を園内研修で伝えたところ「子どもへの見方が変わった」「行動をさらによく観察するようになった」と、いろいろな感想がありました。見方ひとつで考え方や観る視点が変わることもある、ということでした。

皆さんにも“子どもを観る”という視点の一つに今回の内容が参考になれば嬉しいです。（ソム）